HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語と韓国語補助動詞の意味拡張における通時的対照研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	一色, 舞子
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第11174号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/55571
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Maiko_Isshiki_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　一　色　舞　子

審査委員　主査　准教授　李　　連　珠
　　副査　教　授　小　野　芳　彦
　　副査　教　授　冨　田　康　之

学位論文題名
日本語と韓国語補助動詞の意味拡張における通時的対照研究

補助動詞は、日韓両言語それぞれにおいて盛んに取り上げられ、研究されてきたテーマの一つである。補助動詞における複数の意味・用法間の拡張関係をどう捉えるかが主な論点であったが、意味拡張という通時的現象を共時的に論じる段階にとどまっている。

本論文は、補助動詞がどのようなプロセスを経て本来の動詞（本動詞という）から形成されるのかを捉えようとするものである。日本語と韓国語は言語類型論的に極めて類似する点が多いが、補助動詞という品詞もその一つである。意味・機能の変化は類似する語群での対照から観察できるという対照研究の手法を日韓両言語に広げることで、補助動詞の形成プロセスを汎言語的に捉えようとしているのである。

分析対象となっているのは、本動詞としての意味に異同があっても補助動詞における意味・機能に共通点がある日韓それぞれの固有動詞である。まず、本動詞・補助動詞の意味・用法を詳細に分類する。さらに、両国の歴史的文献から補助動詞としての用例を収集し、その用法を分類に従って分析する。このように補助動詞の意味・機能と形態を通時的に記述し、その両面の分布を追うことにより補助動詞の形成および意味・機能における変化の様相を記述している。

本論文の研究成果及び意義に関しては、大きく次の三点に絞って語ることができる。まず、補助動詞における意味拡張のプロセスを、信頼できる歴史的文献資料に基づいて、分析・考察しながら実証的に提示したことである。従来、語の意味拡張という通時的現象が、共時的レベルでのみ取り上げられ、論じられてきたことへの反省を踏まえ、補助動詞の意味拡張プロセスを、通時的考察から提示できたことは大きく評価できる点である。次に、本論文は基本的に対照研究の手法により論を展開しており、意味拡張現象を個別の言語領域を超えて、言語類型的にも考察可能な一般的言語現象の一つとして一歩踏み込んだ研究へと引き上げた点にも意義があるといえる。三つ目の意義は、申請者が数年にわたり心血を注ぎながら地道に収集してきた日韓両言語補助動詞の歴史的資料そのものにある。これら歴史的文献資料の分析に際し、当該文面のみではなく前後の文脈までを考慮した的確な意味解釈が施されていることは、氏の日韓両言語の古典文法に対する知識や分析能力が論文へと反映しているとして、審査の際に高く評価された点でもある。これらの歴史的資料からは、本論文で扱っている補助動詞以外にも興味深い言語現象を伺い知ることができ、今後日韓語対照研究における研究題材ないし参考資料として広く活用されることが期待される。

以上のような肯定的な評価の一方で、例えば日韓語「V-V」構造（動詞連続構造）における歴史的変遷のうち、形態的変遷に関する考察が日本語にだけ偏っているとの指摘もあったが、氏は日本語において明らかになった考察結果と関連付けて、今後韓国語における動詞間の結合度の議論へと発展的に継承することが可能であるという展望を述べており、今後の研究課題として示唆している。

本論文の研究成果の一部は、学術雑誌等に計８件の論文として掲載され、国際的学会にて計７回、国内学会にて計３回口頭発表されており、それぞれ評価されている。

以上のような審査結果により、本審査委員会では、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。